前回までのあらすじ

流遠(るとお)やみひめは、小学六年生の普通の女の子。
学校があって、友達がいて、好きな男の子がいる。
しかし、そんな平穏な生活は、とある少女との出会いで一変してしまう。
少女の名はツバキ・タカチホ。
彼女は地球とは別の星・惑星ゼヘナから来たという。
ツバキの目的は〈カタストロ〉と呼称される敵性体の殲滅(せんめつ)であり、彼女はそのための存在――〈機獣(きじゅう)少女〉だった。

〈カタストロ〉を殲滅(せんめつ)し、ツバキは故郷の惑星ゼヘナに帰り、やみひめは以前のように普通の生活に戻れると思っていた。
しかし世界は改変され、やみひめと橘(たちばな)アサト、そして友人のクラウ・P・ブランはゼヘナに転移してしまう。彼等はゼヘナを危機に陥(おとしい)れている別の敵性体――〈プレケース〉の存在を知り、その打倒に協力する事となった。
状況は更に変化する。
古代種と呼ばれる機獣――〈スティンガー〉の復活である。
猛威を振るう〈スティンガー〉とその幼体群による被害は、〈プレケース〉を遥かに超え、今なお犠牲は増えつつあった。
そんな中、状況を打開すべく立ち上がった十人の〈機獣少女〉達によって、〈スティンガー〉殲滅(せんめつ)作戦が発動。ヒナミ・シティを決戦の舞台とし、各所で戦闘が開始された。

※登場人物紹介はこちら

機獣少女ゾイカルやみひめ The NOVEL REVIVAL

静まり返った無機質な通路を進みながら、少年――橘（たちばな）アサトは、その気怠（けだる）い表情とは裏腹に、心中（しんちゅう）穏やかではいられなかった。間もなくヒナミ・シティという街で大きな作戦が始まる。それに見知った少女達が参加するのだ。

ひょんな事から奇妙な関係となってしまった小学六年生の少女、流遠（るとお）やみひめ。

やみひめを通じて知り合った、別の星から来た小学五年生の少女、ツバキ・タカチホ。

行方不明となった妹かもしれない、ゼヘナで暮らす高校二年生の少女、カナコ・T・シングウジ。

そして、面識がある程度だが、やみひめのクラスメイトで、共に地球からゼヘナに跳（と）ばされてきた少女、クラウ・P・ブラン。

彼女等を含めた十人の少女達が、もうすぐこの惑星ゼヘナの存亡にすら関わりかねない敵と戦う。

無論、彼女等は普通のか弱い少女ではない。〈機獣少女〉と呼ばれる戦士だ。性別や年齢を理由に、彼女等を戦わせる事を後ろめたく感じる必要はない。むしろ、ただの男子高校生であるアサトに戦えという方が無茶な話なのだから。

だがそれでも、年端（としは）もいかない少女達に戦いを強（し）いている状況に、何も感じないはずがない。

「――心配？」

声はすぐ隣からかけられた。金髪碧眼（へきがん）の穏やかな印象の美女である。

ロゼット・コダール。

ある意味、此処（ここ）では異邦人であるアサト達が、もっとも世話になっている人物と言える。稀代（きだい）の技術者であり、一大企業である〈L．C．ファクトリー〉の最高責任者の彼女が、アサト達『地球組』の衣食住の面倒を見てくれているのだから。

ちなみに、どう見ても女子大生といった容姿と雰囲気だが、こう見えて三十二歳である。

「そりゃ、まあ……」

「あれ、意外だなぁ。男の子って、こういう時は『別に』とか言うんだと思ってたよ」

確かに十代男子の自尊心は無駄に強い。何がそうさせるか判らないが、とにかく妙な見栄（みえ）を張りたがる。阿保（あぼ）なのだろう。

ちなみに、アサトの場合は見栄を張ったり強がったりするのが面倒だというのもあるが、それ以上にロゼットに毒気を抜かれたというのも大きい。虚勢を張らなくていい、甘えてしまってもいい、そんな母性にも似た、『姉性』とでも呼ぶべき雰囲気が彼女にはある。

「当然だよね。知ってる子達だもん」

朗（ほが）らかな口調はそのままに、からかうような意味合（ニュアンス）いが鳴りを潜めた。ロゼットも心配

なのだ。当然だろう。ゼヘナ組についてはアサトなどより付き合いは長いだろうし、出会って日が浅い自分達の事も気にかけてくれている。思うところがあるのか、特にクラウに対してはそれが顕著だ。

「そういえば、やみ子ちゃんとクラウが猛特訓してた時、陣中見舞いに来てたツバキと二人きりになってたよね？」

雰囲気を暗くしないため、あえて空気を読まない事を選択したのだろう。下世話な笑みを薄っすらと浮かべ、ロゼットは二日前の出来事を挙げた。

ヒナミ・シティを決戦の場とする〈スティンガー〉殲滅のための作戦要綱――通称〈ヒナミ総力戦〉発動二日前。

クラウのMBデバイス起動試験にも使用した〈L．C．ファクトリー〉の所有する演習場では、〈機獣少女〉としては素人同然である二人の集中特訓が行われていた。それぞれ戦闘スタイルが近い者同士、やみひめには〈獅子王〉アイナ・ボーグマンが、クラウには〈竜帝〉ルイゼ・ルンシュテッドが教導役となり、実戦さながらの教導が行われていた。

そんな中、ただの男子高校生であるアサトに出来る事もなく、ただ二人がシゴかれる様子を管制室のモニター越しに眺めていると、来客が現れた。セミロングの黒髪を左側頭部で結ったサイドテールがトレードマークの少女。

ツバキだ。

「こんにちは、橘さん」

礼儀正しく、年上相手でも物怖じしない、相変わらず小学生とは思えない大人びた少女だと思う。

「いかがですか、お二人は？」

挨拶もそこそこに、ツバキが猛特訓中のやみひめとクラウの様子を訊ねる。アサトは開きかけた口を一度閉じ、

「見ての通りだ」

と改めて口にした。

モニターを目にしたツバキに、わざわざ説明するのも馬鹿馬鹿しいと思ったのだ。

「そのようですね」

苦笑を浮かべて答えるツバキ。地球とゼヘナでは『特訓』の意味が違うのではないかと、アサトはその内容にドン引きしたものだが、ツバキはアイナとルイゼの教導のやり方を予

想していたのだろう。

だからなのか、二人の様子についてそれ以上は触(ふ)れず、ツバキは雑談とも思える話題を振ってきた。今思えば、それは手持ち無沙汰(ぶさた)で何も出来ないアサトに対する、ツバキなりの気遣いだったのかもしれない。

本当になんでもない話から始まり、話題はアサトが飼っている猫のベアトリーチェに及んだ。アサトの家に滞在していた際、ツバキは随分とベアトリーチェと仲良くなっていた。別れを告げる間もなくゼヘナに帰ってしまったため、余計に恋しいのかもしれない。

「そうだ――画像、見るか？」

ゼヘナにおいては何の役にも立たない携帯電話を取り出し、画像ファイルを開いた画面を見せるアサト。充電が出来ないため電池が切れればそれまでだが、カメラとしてしか使い道がないのであれば、別に構わない。

「小さい！　これ、ベアトリーチェですか⁉」

思わぬ食い付きを見せたツバキは、身を乗り出して携帯電話の画像に写った子猫を凝視している。その際、隣に座っていたツバキとの距離がゼロになり、身体(からだ)が密着した。画像に夢中で気付いていないようだが、彼女の小学五年生とは思えない発育をした、ふくよかな部分がアサトの左腕に載(の)っている。色々な意味で信じがたい光景だ。

「……」

「橘(たちばな)さん？」

反応(リアクション)出来ずにいるアサトを不審に思ったのか、ツバキがきょとんとした表情で見上げてくる。

「あ、ああ……まだ子猫の頃だな」

「そうなんですね。子猫の頃も可愛いです……」

ツバキはうっとりとした表情で、画像の幼いベアトリーチェを見つめている。これはもっとも古い画像で、新しいものに表示が切り替わっていく度(たび)、ツバキは黄色い声を上げていた。普段は大人びた印象の彼女が、歳相応にはしゃいでいる姿は微笑(ほほえ)ましくもあり、新鮮でもあった。妙に意識してしまっていたが、これなら普通の小学生にじゃれつかれているのと変わらない。

「……」

いや、むしろ背徳感が増して非常によろしくない。ツバキは無邪気にはしゃいでいて、無意識に身体を密着させているだけなのに、アサトだけが一方的に意識してしまっている。しかも状況は密室に二人きりだ。これは穏やかじゃない。

「……ツバキ、自分で操作してくれていいから」

「え？　でも、壊したりしたら申し訳ないです」
「大丈夫だ。そうそう壊れないし、このボタンで次の画像に行くから――」
「このままでお願いします」
アサトの言葉を遮（さえぎ）るような、ツバキにしては珍しく強い口調だった。より身体（からだ）を密着させ、笑顔だが、反論は許さないといった雰囲気を醸（かも）し出している。
「……はい」
謎の威圧感（プレッシャー）に圧倒され、アサトは左腕に柔らかな弾力と重みを感じつつ、携帯電話の画像を表示させ続けた。心なしか、画面に表示されているベアトリーチェが呆（あき）れているような気がした。

ロゼットの言葉に、アサトは件（くだん）の出来事を思い浮かべた。あの時のツバキは、危険な作戦の前で不安なのを誤魔化そうとしていたのかもしれないと、今になって思う。
「ツバキって小学生だけど、信じられないくらい大人びてるじゃない？」
廊下と呼ぶには無機質な通路を進みつつ、ロゼットは薄（う）っすらと浮かべた下世話な笑みをほんの少しだけ深めた。
「ひょっとして、二人きりだからって良い雰囲気になってたりして」
管制室とはいえ、別にそれぞれの特訓の様子を監視（モニタリング）する必要もないため、部屋に職員の姿はなく、ツバキが来るまではアサト一人だった。つまり、ロゼットの言う通り二人きりだった事になる。

「あー……いや、ただにゃんにゃんしてただけだ」

「……え？」
アサトの答えにロゼットが固まる。彼女にしてみれば、場を和（なご）ませるための冗談で、本気で下世話な内容を期待していた訳ではないのだろう。アサトのまさかの発言に、思考が完全に停止していた。
「――あ、違うぞ。『にゃんにゃん』っていうのは俺が飼ってる猫の事で」
一瞬遅れて、アサトは自分の失言に気付き、携帯電話を取り出して愛猫の画像を見せた。なぜ『にゃんにゃん』などという表現が口をついて出たのか。ひょっとしたら、あの時の動揺が蘇（よみが）えったのかもしれない。
「な、なんだ。『にゃんにゃん』って猫の事ね。そっかそっか。あっはははは……」

ロゼットが何を想像したかは追及しない。これ以上気まずい空気になるのはアサトとて本意ではないのだから。

……。

しばらく無言で通路を進む。

アサト達がいるのは、封鎖区域――〈エリアD〉の封印施設内だ。

数時間前、ヒナミ・シティ付近で〈ヒナミ総力戦〉の参加メンバーをホバー式カーゴトレーラーから降ろし、アサトはロゼット共にそのままトレーラーで南下、封鎖区域に向かった。目的は行方不明になった三名――ベアトリーチェとタオエンのファフロウ姉妹、そして密航していたらしいキリエ・ソウマの捜索。だが、報告にあった地割れは底が見えず、現状での捜索は不可能と判断し、もうひとつの目的である封印施設の調査に移る事となった。

「不愛想な施設でしょ？　あくまで〈スティンガー〉を封印し続けるためだけに造られたから、メンテナンス用の通路しかなくて、内装も素材のままなんだ」

先導するように少し先を進むロゼットが、背中を向けたまま言う。彼女の言う通り、壁はコンクリートの打ちっぱなし、鉄骨や配線が剥き出しの場所もある。照明も装飾性が皆無で、シンプルな電球が等間隔に天井に固定されているだけ。

「私みたいなのが半年に一度来るだけだから、当然なんだけどね」

ロゼットはこの施設のメンテナンスを請け負っているため、足取りに迷いがない。動くものはなく、音もなく、綺麗なだけの廃墟とも呼べる此処は、アサトからすれば気味が悪いが、彼女は慣れているのだろう。

無関係のアサトがなぜ同行しているかといえば――大した理由はない。〈ヒナミ総力戦〉の発動中、一人〈L．C．ファクトリー〉に残っていても気を揉む事しか出来ないのなら、調査に同行させた方が気が紛れるだろうというロゼットの気遣いだ。強いて言うなら、〈スティンガー〉の封印が解かれたのを人為的な理由ではないかと指摘した彼なら、何か現場でもゼヘナの人間では発想しないような意見をくれるかもしれない――というのが、一応の名目である。

通路を更に奥へ進む。ここまでは異常は見当たらなかった。

だが――

「……アサト君の予想が当たっちゃったか」

通路の終着点。メンテナンス箇所の最奥にて、初めて異常が発見された。壁が破壊され、人間が通れるくらいの隙間が出来ていた。この大きさでは、〈プレケース〉や〈スティンガー〉の幼体は通れない。つまり、これは人間の仕業という事になる。

「けど、ゼヘナの人間なら、こんな事はしようとも思わないのが普通なんだろ?」
「うん。つまり、犯人は正気じゃないか、アサト君達みたいな異邦人か。とにかく、先へ進んでみよう」
ロゼットが破壊された壁を進もうとすると、ずっと無言で殿(しんがり)を務めていた娘が久方ぶりに口を開いた。
「ここからは我(われ)が先行する。ロゼット、汝(なんじ)もこの先は未知の領域であろう」
彼女はアニス。建前上はロゼットの秘書という事になっている。年齢不詳で、見る者によって十代の少女にも、二十代半ばの妙齢の女性にも見える。長い黒髪の前方だけをまっすぐに切り揃(そろ)えた特徴的な髪型は、カナコの『姫カット』と並んでアジアンビューティを彷彿(ほうふつ)とさせる。
「そうだけど。犯人がまだ中にいるかもって事?」
「判らんが、用心はしておいた方がいい」
アニスのすべてを見通すような紫眼(しがん)が、壁の隙間(すきま)の向こう側を見つめる。今の彼女は秘書然としたスーツ姿ではなく、上衣下裳(じょういかしょう)と呼ばれる中国方面の民族衣装に似た服装のためか、その神秘性がより強調されていた。
人間は闇を恐れる生き物だが、この〈スティンガー〉と同じ古代種を自称する彼女もまた、闇に対して同じような感情を抱くのだろうか。
アニスに倣(なら)って壁の向こう側を見つめるアサトは、ふとそんな事を思った。

第三十一話

『アカイツキ』

白と黒のコントラストが戦場を舞う。

退廃的でいてシックなデザイン性重視の厚手のドレスに、ふんだんにあしらわれたフリルとレースによる華美な装飾。ゴシックロリータと呼ばれる少女ファッションの極致。街中で見かければぎょっとするが、あるべき場所でなら他の追随を許さない圧倒的な存在感を示す、ある種の局地戦用装備。

当然、此処は古びた洋館の一室でも、ダンスパーティ会場でもないため、その衣装は浮きに浮きまくっていた。

だが――

「……っく」

白いゴスロリ衣装を身に纏った少女の一撃を受け、ツバキは息を漏らす。重い一撃だ。

攻撃はまともに受けず、流し、可能な限り躱す事を心がけているが、そんなツバキが受けざるを得ない。動きにくいはずの衣装で、しかしそんな様子を一切感じさせないゴスロリ少女の挙動は、場所や状況など知った事ではないと言わんばかりだ。

サイドテールにした黒いセミロングがわずかに震える。じりじりと押されているのだ。ツバキとゴスロリ少女では体格に差がある。〈機獣少女〉の肉体が強化されているとはいえ、敵も同じ条件であるなら、やはり手足が長い方が戦いには向いている。小学五年生の未だ成長の余地を多分に残した体躯では、不利は否めない。

「――――ッ！」

それでも劣勢を悟られまいと、ツバキは視線で相手を威圧する。普段は穏やかな色を湛えた青い瞳が、今は険しく敵を見つめていた。

「……」

しかし、並みの人間なら委縮してしまうような視線を向けられても、ゴスロリ少女は表情を崩さない。完全なる『無』のままだ。

〈ヒナミ総力戦〉は成功した。目標である〈スティンガー〉打倒は果たしたのだから。

だがその直後、頽れた〈スティンガー〉の頭部装甲が弾け、中から姿を現したのが、この白いゴシックロリータに身を包んだ少女だった。

年齢は高校生くらいに見える。黒い髪は適当に切ったように長さが不揃いで、同じく黒い瞳は右側が眼帯で隠れている。

美しい。だが、その無表情、光のない瞳、引き結んだままの唇、極めつけは死装束のようなゴシックロリータ……ただ美しいと表現するのでは言葉が足りなすぎる。

正体を知ろうにも問いかけには一切答えず、ツバキとやみひめを認めると、問答無用で攻撃を仕掛けてきたのだった

「――はぁぁぁ……ッ！」

裂帛の気合――と呼ぶにはやや迫力に欠ける叫びと共に、ゴスロリ少女の背後から、黒い和装の少女が現れた。ポニーテールにした長い黒髪を激しく揺らし、ツリ目がちの橙色の瞳は普段より鋭い。

やみひめだ。

平均的な小学六年生といった体格で振るうには不似合いな得物を、ゴスロリ少女の無防備な背に振り下ろす。

「うううう……っ」

しかし、やみひめの大剣タイプのＭＢデバイス〈ヤタガラス〉は、ゴスロリ少女が左腕に装備した盾でなんなく受け止められた。右腕はツバキのＭＢデバイス〈カグツチ〉と鍔迫り合いを行ったままなのだから、恐るべき膂力と集中力だと言える。

「……」

無言でゴスロリ少女が猛威を振るう。力任せに両腕の装備を振り回し、ツバキとやみひめ、小柄な少女とはいえ二人分の体重を薙ぎ払った。

後方に飛ばされながら、逆方向に消えていくやみひめの姿とは対照的に、ゴスロリ少女が肉薄してくる。右腕に装備した奇妙な『刃の束』とでも呼ぶべき武器が振り下ろされ、弾き返すと、次は突きに転じてくる。慣性の法則に従って緩やかに弧を描きながら地表に向かい、その間に幾度も攻撃を叩き込まれる。そうしているとやみひめが加勢に駆け付け、また薙ぎ払われる。

その繰り返しだ。

二対一なら相手の体力が先に尽きるはずだが、そんな様子はまるで見られない。むしろ、このまま持久戦に持ち込んでも、不利になるのはツバキ達だろう。

「……」

ゴスロリ少女は無言で、無表情のまま、ひたすら攻勢に出てくる。速さと出力に秀でた戦闘スタイルはクラウに近いが、なんというか出鱈目なのだ。正規の訓練を受けた者の戦い方ではない。どんな武術や流派にも定石があり、それは膨大な数の経験則によって導き出された最適解であると同時に、『型にはまる』という事でもある。つまり、訓練された者ほど、動きは読みやすい。

しかし眼前のゴスロリ少女にはそれがない。予想もつかない動きや、前後の脈絡のない合わせ技で翻弄される。非常にやりにくい。

「――ツバキ！」

「……っ！」

自分を呼ぶ声と、飛来する物体の正体に気付き、ツバキは渾身の力でゴスロリ少女の得物を押し返し、後方に大きく跳んだ。相手もまた状況に気付いたらしく、押し返される力を利用してツバキとは逆方向に跳んでいた。

一瞬前まで二人の少女が鎬を削っていた広場に、数本の刃が次々と突き立てられる。機械の剣とでも呼ぶべき意匠の白い刀身。まったく同じ見た目のそれらが墓標のようにアスファルトの地面に突き立ち、やがて見えない手によって空中に引き抜かれると、まるで投擲された槍のようにゴスロリ少女を追撃した。

あの攻撃をツバキは見た事がある。地球で一度、ゼヘナで一度。何本も複製した〈カグツチ〉――やみひめが使っていた時の形状――を誘導ミサイルのように遠隔操作するものだ。どうしてそんな事が可能なのかは、まるで判らないが。

「よかった、ちゃんと伝わって」

「伝わっていなければ、私は串刺しでしたよ?」

傍らに降り立ったやみひめに、ツバキは冗談めかして答えた。軽口を叩く余裕がある事に安心したのか、やみひめも少しだけ表情を緩めた。

「なんなの、あの人？　なんかもうデタラメだよ。〈機獣少女〉なの？　なんで〈スティンガー〉の中から……？」

だが、すぐに表情が不安の色に変わる。それはそうだろう。『二つ名』持ちで名うての〈機獣少女〉であるツバキの目から見ても、正体不明のゴスロリ少女の力は圧倒的なのだから。

「判りません。〈機獣少女〉らしきものとしか、私には……」

「あ、ごめん……そうだよね」

ツバキを困らせていると気付き、やみひめがしゅんとする。

『――暗くなっている場合ではないぞ。まずは、あれをどうにかせねば』

女声を思わせる機械音声が二人の耳朶を打つ。ツバキの得物である薙刀タイプのMBデバイス――〈カグツチ〉が発したものだ。

「う、うん……そうだよね！」

「〈カグツチ〉、何か策はありませんか？」

やや空元気といった様子のやみひめに対し、〈カグツチ〉に具体案を問うツバキは現実的だ。

『やみひめ、地球での最後の戦いで、其方は私との経路を経由してツバキに機力を供給していたな？』

〈カグツチ〉が言っているのは、やみひめがクラウの凶刃に倒れた際、やむを得ずツバキが〈機獣少女〉となって戦った時の事だ。当時、応答不能状態だった〈カグツチ〉が意識

を取り戻すと、すでにツバキがやみひめからの機力供給を得ていた状態だったが、MBデバイスである彼女は状況を把握していたらしい。

「え？　そ、そうなの？　そういえば、なんだかそんな感じがしてたかも……」

『無意識だったのか……。そうなると、私の策は難しいやもしれぬ』

「どういう事？」

「あの時のように、やみひめさんの機力を私に送ってもらい、〈ブラスター・システム〉を使おうという訳ですね」

〈ブラスター・システム〉。

それはツバキのMBジャケットに実装された試作段階のシステムである。総合性能が大幅に上昇するが、代償として機力を激しく消耗し、通常であれば三分ほどしか維持出来ない。対〈カタストロ〉戦においては過剰な戦力なため、実戦で使う事はないと思われていたが、件の戦いにおいて初の実戦での使用を経験した。その力は凄まじく、機力の消耗を考慮しなければ、強敵に対しては奥の手となり得る。

『そういう事だ。やみひめよ、私と其方の経路はまだ生きている。やれるか？』

「えっと……こ、こうかな！」

「――っ!?」

身体に熱が走ったような感覚がツバキを襲った。その熱は仮想器官であるMBコアに集束し、改めて身体中に拡散――いや、循環していく。自分のものではない機力が、〈カグツチ〉との経路を通じて流れてくる。

これはやみひめの機力だ。

『ふむ。上出来だ』

「なんか出来ちゃった……あ!?」

やみひめが不意に声を上げた。彼女の視線の先を目で追うと、今まさにゴスロリ少女によって、複製された〈カグツチ〉が消し飛ばされていた。恐らくはクラウやルイゼの荷電粒子砲と同等の兵装だろう。勝ち誇るでもなく、彼女は即座にツバキ達へ向かってくる。爆発的な加速性能だ。

「私が押さえるから！」

「あっ」

ゴスロリ少女に負けず劣らぬスタートダッシュで、やみひめがツバキの声を背中で聞く。二人がかりで押されていたため失念していたが、やみひめもまた規格外な存在なのだ。ツバキが〈ブラスター・システム〉を使えば、状況をひっくり返せるかもしれない。

「〈カグツチ〉、使いますよ」

『応とも』

決意を固めた主に、パートナーが頼もしく応じた。

「〈ブラスター・システム〉――起動」

『起動コードを。〈汝、人なりや？〉』

「――〈否、我は機獣少女。悪鬼羅刹の類なり〉」

起動コードが承認され、〈ブラスター・システム〉が起動する。MBジャケットが再構築され、ミニスカートだったアンダーが丈の長い袴に変わり、薙刀状だった〈カグツチ〉も弓のような形状へと変わる。見た目では判らないが、全身を循環する機力が活性化し、力が漲るのを感じる。

『異常はないか？』

姿を変えた〈カグツチ〉が問うた。彼女はツバキの状態を把握しているため、これは質問というより確認だ。

「問題ありません。むしろ絶好調です」

いつもの澄まし顔に微笑を浮かべ、ツバキは〈カグツチ〉を構える。その弓のような形状と、袴へと変わったMBジャケットから、今の彼女は弓道少女といった装いだ。

「ここから形勢逆転といきましょう」

●
●
●

少女は戦っていた。

此処ではない何処か。

現在とは違う何時か。

強く巨大な機械の獣を使役し、戦って、戦って、戦い続けた。

戦いたかった訳じゃない。

強制されていた訳でもない。

ただ、それしか出来ないから戦っていただけ。

そして、それが嫌ではなかった。

自覚はなかったが、ひょっとしたら戦うのが好きだったのかもしれない。

適性はあった。

高揚感もあった気がする。

ならば、きっと戦うのは好きだったのだろう。

どれだけ戦っただろう。

どれだけの敵を屠(ほふ)っただろう。
負けた事はなかったと思う。
決着がつかなかった事はあったかもしれない。
（……そうだ。最後の戦いであたしのシロイリュウはクロイオオカミと戦って、ヒカリノハシラが――）
最後の戦い。
白い竜と黒い狼。
光の柱。
（……まだ何か忘れてる気がする）
何かに呼ばれた。
何かを言われた。
その通りにした。
そのまま眠っていいと言われた。
それから――
（……もうなにもしたくない）
あのまま静かに、眠るように、消えてしまいたかった。
（……あの子がいない世界なんて――『あの子』？　誰だっけ……？）
思い出せない。
とても大事な存在だったはずなのに。
彼女がいなければ生きている意味がない。
そのくらい大好きだったはずだったのに。
（……思い出せないなら、もういいのかな――）
『ふざけるな！』
（……？）
『死にたい奴は勝手に死ねばいい！　生きてりゃいい事があるなんて言うつもりも無い！けど、あんたはまだ生きてるんだろう!?』
誰の言葉だっただろう。顔も名前も知っているはずなのに、思い出せない。

『あきらめるな！　勝手に見限るな！　この世界はあんたを否定なんかしちゃいない――ッ!!」

うるさい。

もう放っておいてほしい。

『――カグヤ！』

（……っ!?）

名前を呼ばれた。

もう呼んでもらえる事はないと思っていた声で。

紅い髪。

紅い瞳。

小さくて。

とても蠱惑的で。

優しい女の子。

（……ねえ、××××――月が紅いよ）

●
●
●

やみひめの使うMBデバイス〈ヤタガラス〉、それは特殊な形状の黒い剣である。刃渡りは一メートルと長く、幅広で、機械的な意匠に紅いラインが映える。

「でぇぇぇいッ！」

小学生の女の子が振るうには取り回しが悪そうな得物を、やみひめは半ば強引に振り下ろす。ゴスロリ少女は右腕の奇妙な『刃の束』とでも呼ぶべき武器で応戦。互いに力任せに振られた武器同士がかち合い、嫌な音を立て弾き合う。

「っく！　……はぁぁぁッ！」

弾かれた勢いのまま、やみひめは身体ごと〈ヤタガラス〉を百八十度旋回。遠心力を上乗せした大振りの一撃を叩き込む。ゴスロリ少女はこれを左腕の楕円形の盾で受け止め、その内側に仕込まれていた一対の刃を展開し、〈ヤタガラス〉の刀身を挟み込んだ。まるでカニバサミだ。

「……」

得物を掴まれ、身動きが取れなくなったやみひめに凶刃が迫る。三本の刃が束ねられたそれは、顔に突き立てられれば、ちょうど両目と口を貫通し、風通しをよくしてくれるに違いない。

だが――

「っ！」

咄嗟に〈ヤタガラス〉を手放し、やみひめはゴスロリ少女の左側に回り込んだ。突き立てられた奇妙な『刃の束』は空を斬り、得られるはずの手応えを見失った少女は大きく前方につんのめった。

「――撃って！」

やみひめが叫ぶと、背中に展開していた羽根が微細な振動を放つ。眼前にテニスボール大の紅い光球がいくつも現れ、彼女の言葉に従って撃ち出されていく。

〈E．I．アビリティ〉。

正規のMBデバイスを用いた〈機獣少女〉にはない、流遠やみひめの固有能力である。そして、使用時に背中に展開される鋭利な刃に見えるそれは羽根ではなく、能力を制御するための送受信機なのだ。

「……」

無防備な背中に迫る脅威に気付き、ゴスロリ少女は挟み込んでいた〈ヤタガラス〉を放り投げ、カニバサミを収納して盾を構えた。

「……っ！」

やみひめは光球の動きを制御。半数は直進のまま、残り半数を迂回させ、ゴスロリ少女を挟撃する。これでは後方から迫る光球は盾で防げない。半分は直撃コースである。

ゴスロリ少女は動かない。下手に回避するより、受けきる事を選んだようだ。

「――〈ヤタガラス〉！」

主の呼び声に応じ、解放された黒塗りの機剣が自力で飛来する。やみひめの手に〈ヤタガラス〉が収まるのと同時、ばちばちと弾ける細く黒い光を纏った紅い光球の群れが、一斉に獲物に殺到する。

閃光が奔り、遅れて爆音と衝撃が生まれる。並みの〈機獣少女〉であるなら、勝敗は決したはずだが。

「だよね……」

煙が晴れ、周囲のアスファルトがズタズタになった道路上に、ゴスロリ少女の姿は健在だった。見れば、右腕の装備――束ねていた三本の刃が大きく展開し、その先端を頂点とする三角形の光の力場のようなものが形成されている。恐らくは障壁。あれと左腕の盾で

以(もっ)て、前後からの光球を完全に防いだのだ。
光の力場が消え、基部を軸に回転していた三角形が止まり、刃が畳(たた)まれて元の形態に戻った。左腕の盾と同様、攻防一体の装備らしい。
「……？」
不意にゴスロリ少女の動きが止まった。その場に立ち尽くし、じっと空を見つめている。すでに日は沈み、夜空には月が浮かんでいた。
並んで浮かぶ二つの月、それが――
「紅(あか)い……」
やみひめの目にも、紅く光る月は幻想的に見える。だが、この状況で、あのゴスロリ少女はその美しさに魅入られてしまったのだろうか。

完全に奇襲をかけるタイミングを逸(いっ)してしまった。
煙が晴れ、やみひめが攻撃を再開するのに合わせてツバキも動くつもりが、戦場は停滞してしまっていた。
「どうしたんでしょう」
ゴシックロリータを身に纏(まと)った少女は、此処(ここ)が戦場である事など忘れたかのように立ち尽くし、月を見上げている。
『ふむ。紅(あか)い月が珍しいのか、月の魔力に魅入られてしまったのか、どちらにせよ奇襲をかけるなら今だが』
〈カグツチ〉の言う通りだが、あそこまで無防備にされてしまうと、罠を警戒する以前に気が引けてしまう。
思案していると、状況に変化が起きた。ゴスロリ少女が膝(ひざ)を折り、右手で前頭部を抑えている。ツバキにはそれが、頭痛に苦しんでいるように見えた。
「何が……」
『ツバキ、やみひめからだ。繋ぐぞ』
ＭＢデバイスによる通話機能。〈ヤタガラス〉は正規のそれではないが、規格はほぼ同じため、通話が可能だ。
「……判りました。やってみましょう」
通話を終え、ツバキはやみひめから告げられた内容に、内心で嘆息(たんそく)した。
『まったく、厄介(やっかい)な事よな』
「……楽しそうに聞こえますよ、〈カグツチ〉」

『うむ。こういうのは心が躍るというものだ』

「……はあ」

これから実行する内容と、パートナーの性格に、ツバキは大きく嘆息した。

●●●

封印施設の通路の終着点にて発見された、破壊されて出来た壁の隙間。人間が通れる程度のそれを抜けると、内部はそれなりの広さがあるようだった。

「暗いな」

「う～ん……照明はないっぽいね。人が入る事は想定してないのかもしれない」

アニスに続いて侵入してきたアサトとロゼットが口々に言う。

「やむを得まい」

上衣下裳と呼ばれる独特の民族衣装の両袖が一瞬はためいたかと思えば、アニスが正面に捉えていた、今まさに彼等が通ってきた隙間が壁ごと破壊されていた。ちょうど通路と同じ大きさに、破壊と表現するには正確すぎる精度で、まるで見えない刃物か何かで切断したかのように。

「古代種ってのは、こんな事も出来るのか……というか、壊していいのか？」

「まあ、もう施設自体に意味がないからね。それより――」

通路を照らしていた光が差し込み、壁の内部がなんとか見える程度には明るくなっていた。

「何のための空間だろう？　アニス、何か判る？」

重要施設の損壊より、好奇心の方が優先らしい。ロゼットは薄暗い壁の内部を見回し、アニスに問いかけた。

「……」

「……どうしたの、顔色がよくないよ」

返事がないため振り向くと、アニスは何かを必死で思い出そうとしている様子だった。

「……我は何を忘れてしまった。いや、何を思い出そうとしている――」

とても重要な事を忘れてしまっているのに、それが何か思い出せない気持ちの悪さ。きっと誰もが一度は経験があるだろう。だが、アニスは古代種と呼ばれる人知を超えた存在だ。そんな彼女が、重要な事柄を忘却の彼方とする事があり得るのか。

「……？」

アニスの様子を気にしていると、アサトは何か違和感を覚えた。

（なんだ、この感じ……）

知っている。懐かしい感覚。

知らないはずなのに憶えている。

「――――」

「っな……!?」

不意に彼女は現れた。正確には最初から存在していたにも関わらず、誰も彼女に気付かなかったと言うべきか。年齢を当てはめる事にどれだけの意味があるかは判らないが、年の頃はアサトと同じ高校生くらい。長く真っ直ぐな紅い髪と、同じく紅い瞳。端正な顔立ちだが、人形のように一切の表情が浮かんでいない。

『紅ノ姫』――そんな言葉がアサトの脳裏に浮かんだ。

紅い髪の少女は無感情な瞳でアサトを一瞥すると、最後まで何も語らずに――消えた。

「……なんだったんだ――」

幻か、もしくはあれが幽霊と呼ばれるものなのか。

「――！　アサト君、その子は……!?」

「え……？」

ロゼットが何かに気付き、慌てた様子で目を見開いていた。その視線はアサトの胸元辺りに向けられており、彼が見下ろすと、其処には十五歳くらいの少女がお姫様抱っこされる形で腕の中に収まっていた。

「……」

まるで覚えがない。ついさっきまで、紅い髪の少女が現れて消えるまで、こんな少女はこの場にいなかった。

「今の紅い髪の女の子が置いていった？　だとしても、今までその子は何処にいたの？　そもそも、今の子だって……嗚呼、もう訳が判んないよ!?」

状況を分析しようと頭をフル回転させているようだが、機械系の技術者であるロゼットにとって、恐らくはこのオカルトじみた現象は専門外だろう。

アサトは再び腕の中の少女を見下ろす。会った事はないが、消えた紅い髪の少女と同じく知っている。記憶の何処かで憶えているのだ。

「……ん」

腕の中の少女が身動ぎ、ゆっくりと瞼を開いた。そしてアサトを認めると、こう呼んだ――

「――兄様……」

夢見るような穏やかな笑みを浮かべ、すぐに少女はまた瞳を閉じた。眠ってしまっただけのようで、すぐに小さな寝息が聞こえてきた。

「今、アサト君を『兄様』って呼んだ？　どういう事？」

「……」

アサトに答えられるはずがない。確かに彼には妹がいるが、それはこの少女ではない。だが、アサトは彼女を知っている。思い出せないだけで、記憶の何処かで憶えている。

「……そういう事か」

「アニス？」

「この子、知ってるのか？」

常態を取り戻したと思える様子のアニスに、ロゼットとアサトが問いかける。

「彼女の名はアヤカ・シュバイツァー。人類初のＭＢドライバー。そう……」

ＭＢドライバー。それは今では公文書上でしか使われない〈機獣少女〉の正式名称。

「――〈始まりの機獣少女〉だ」

●
●
●

白いゴシックロリータを身に纏った少女の、すくい上げるような一撃。やみひめは黒い機剣〈カグツチ〉の柄頭から発生させたレーザー・ジュッテで応戦。さすがに想定していなかったのか、ゴスロリ少女がわずかに動揺した。

「――点火！」

『First bullett』

やみひめが叫び、ＭＢデバイスの機械音声が答える。〈ヤタガラス〉の持ち手の上部にある三つの薬莢、その一つが作動し、炸裂音と共に先端が本体内部に侵入、刀身が炎を纏った。

「はあぁぁぁ――ッ！」

ゴスロリ少女の一瞬の動揺を利用したカートリッジ・システムの使用。先の〈ヤタガラス〉を手放した時と同様、こういった咄嗟の判断こそが〈獅子王〉アイナ・ボーグマンから受けた教導の成果だった。彼女は考えるより反射で行動するタイプなため、様々な状況

を再現し、どう動くべきかをやみひめの身体に覚えさせたのだ。

「……」

上段から振り下ろされる〈カグツチ〉を、ゴスロリ少女は後方に跳んで回避。炎を纏った一撃を装備で受けるのは危険と判断したのだろう。だが、その行動は読まれていた。彼女の着地と同時に撃ち込まれた、機力の弾丸による三点射。それは左腕の盾であえなく防がれたが、これも織り込み済みだ。足を止めたゴスロリ少女の背後から追撃する炎の機剣。正面からは援護射撃を行った袴姿の少女――ツバキが迫る。洋弓の上下を短くしたような機械的な形状へと変化した〈カグツチ〉を携え、接近戦の構えだ。

「でぇぇぇいッ！」

「――ふっ」

叫びこそ対照的だが、威力はその限りではない。

片や高熱と膂力。片や速さと技術。どちらも脅威度は変わらない。

「……」

ゴスロリ少女はやむなく、左腕の盾でやみひめの〈ヤタガラス〉を、右腕の『刃の束』でツバキの〈カグツチ〉を受けた。

規格外の能力を持つやみひめと、〈ブラスター・システム〉を時間制限なしで使える今のツバキが、二人がかりでようやく対等。これ以上の時間はかけられない。

『せーのッ！』

やみひめとツバキの声が重なり、タイミングを合わせる。〈機獣少女〉としては素人同然のやみひめは普段通りとして、ツバキまでもが力押しで得物を振り抜いた。

溶断される盾と、基部が耐えらずに宙を舞う『刃の束』。

強い相手を傷付けないように倒すというのは難しい。武器を持っていたり、自分と同等以上の強さであれば尚更だ。ゴスロリ少女は間違いなく強敵で、その装備を無力化する事が出来たのは二人の連携――ほぼツバキが合わせる形だが――があればこそだった。

だが、まだ終わりではない。

「やみひめさん！」

ツバキがゴスロリ少女を背後から羽交い締めにする。体格差があるため、蹌くゴスロリ少女の動きを押さえるのに必死だ。

「〈分断するもの〉！」

やみひめの背中の羽根――E.I.アンテナが微細な振動を放ち、右手が紅い光を纏う。

「――〈その威を示せ〉ッ!!」

右手をゴスロリ少女の胸に突き入れ、発動言語を唱える。びくりと身体が震え、

脱力すると、ゴスロリ少女はやみひめに向かって倒れてきた。ツバキではバランスの問題で支えきれなかったのだろう。やみひめは慌てて右手をゴスロリ少女の胸――実際には付近に発生した『黒い霧』――から抜き、受け止めようとしたが、やはり彼女も体格差があるため叶わず、結果的にゴスロリ少女とツバキ二人分の下敷きとなった。

「ツバキ、重い……」

「す、すみません……!」

ツバキが身を起こし、少しは楽になった。〈機獣少女〉となった今、人間二人分の体重くらいはどうという事もないのだが、気分の問題だ。上から乗られているという圧迫感は、やはり気持ちの良いものではない。

「ツバキ～、この人もお願い～」

「あっ、はい」

脱力したゴスロリ少女を起こそうとして叶わず、ツバキに助けを求める。覆いかぶさって脱力した、しかも自分より体格が大きい人間を動かすのは困難だった。ツバキの手を借り、なんとか少女を動かし、やみひめは身を起こす事に成功した。

「あの、どういう事だったんですか？」

人心地付き、ツバキが訊ねた。彼女には〈分断するもの〉を使うという概要しか伝えていなかったので、疑問は当然だろう。

「あのね――」

「っ！」

やみひめが説明しようとした矢先、倒れている少女に変化が起きた。反転するように、白が基調だったゴシックロリータの衣装が、黒を基調としたものに変わり、武装の類が消えた。この場において違和感である事は変わらないが、純粋な衣服としてのゴシックロリータに戻ったのだろう。判りにくいが、ＭＢジャケットに相当する何かが解除されたのかもしれない。

『――いやあ、助かったよ。ありがとう、お嬢さん達』

唐突に聞こえた――声。

〈カグツチ〉と同じ拡声器を通したような機械音声。中性的な不思議な声だが、恐らく男声だろう。

「誰です……!?」

少女の変化に対して警戒を解きかけていたツバキが、再び臨戦態勢に戻る。

だが、やみひめはこの声に憶(おぼ)えがあった。

そう。彼女はこの声を聞いて、ゴスロリ少女に〈分断するもの(ディバイダー)〉を使う事を決め、その協力をツバキに求めたのだ。

『こんな形でまた会う事になるとは思わなかったよ』

声はゴスロリ少女の左腕に巻かれた、ヘアゴムを思わせるシンプルな腕輪(ブレスレット)から聞こえた。逆十字のペンダントが付いており、それが発しているようだ。

『随分と可愛らしい姿になっているね――〈キョウシュウキ〉』

そう言ってペンダントは、紅(あか)い月の光を受けて妖(あや)しく輝いていた。

つづく

あとがき

どうも、流遠亜沙（るとおあさ）です。

『機獣少女ゾイカルやみひめ The NOVEL REVIVAL』第二十一話をお届け致します。

本編としては実に九ヶ月ぶりとなります。言い訳はブログなどでしてると思うので此処（ここ）では書きません。待っていてくださった方、すみませんでした。

今回はバトってます。久々なので楽しいです。でも長いと飽きてきます。困った事に次の話もバトってます。すでに半分以上は書き終わってますが、もうバトルは書きたくない……よし、飽きないバトルを書こう。ならば戦闘系じゃないタイプの異能バトルだ！　言ってはいけないワードを言うと魂を抜かれ、ＮＧワードが時間経過と共に増えていく部屋で会話バトルとかどうよ!?

……あったんですよ、『幽遊白書』ってアニメ（原作未読）で、そういうネタが！

それでは謝辞を。

まずはチェックをしてくださっている紙白さんに感謝を。第二部に引き続きクラウが登場していますが、ひょっとすると第二部から登場のロゼットの方がすでに出番が多い気がしてきました。まさか、こんな重要なキャラになろうとは……。

そして、ここまで読んでくださった『あなた』に感謝を。ちゃんと完結させますので、改めてお付き合いください。

更新の機会は通常ならあと三回……年内には終わらないだろうなぁ。

２０１８／９／11　流遠亜沙

アンケートに答える

『機獣少女ゾイカルやみひめ The NOVEL XXXXXXX　第2部』小説ページに戻る